

運動部活動の意義を考える

－運動部活動の現代的意義を中心に－

乾 匡

<要旨>

運動部活動についてスポーツ庁から 2018 年にガイドラインが示され、学校現場においては今後も指導者の意識改革や制度改革が求められる。

本研究では現代社会における部活動の内、特に運動部活動の意義を中心に、筆者自身の部活動の経験、筆者の教員としての部活動の指導経験、学校長として学校運営から見た部活動の在り方という観点から検討した。

その結果、運動部活動が、生徒の学力面、進路指導面、生徒指導面に大きく影響すること、運動部活動における保護者との連携の重要性、運動部活動が教員としての成長に影響することの 3 点を述べ、今後も運動部活動が重要であることを示唆した。

キーワード：生徒指導、運動部、部活動、指導方法

1 はじめに

「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」(スポーツ庁, 2018)の前文に「学校の運動部活動は、スポーツに興味・関心のある同好の生徒が参加し、各運動部の顧問の指導の下、学校教育の一環として行われ、我が国のスポーツ振興を大きく支えてきた。」とある。また、「体力や技能の向上を図る目的以外にも、異年齢との交流の中で、生徒同士や生徒と教師等との好ましい人間関係の構築を図ったり、学習意欲の向上や自己肯定感、責任感、連帯感の涵養に資するなど、生徒の多様な学びの場として、教育的意義が大きい。」と記述されている。

学校教育の一環として営まれてきたわが国の運動部活動は、歴史的に見ても、世界に類を見ない日本独自の教育システムであり、同時に日本代表などのトップアスリートを頂点とする競技スポーツの下支え的存在でもあった。筆者の実践経験からも学習活動の場面だけではなかなか達成することが困難な生徒の「人間的成長」という教育の本質が内在し、運動部活動は人間教育にとって素晴らしい教育システムであると認識している。

東京オリンピック(1964年)が開催された1960年代中頃までは、文部省(現文部科学省)の方針として、運動部活動をあくまで教育活動の一環として位置付けていた。そのために対外試合の基準を厳格に定めたりすることなどにより、勝

利至上主義や商業主義を抑制するための施策がとられていた。ところが、1964年の東京オリンピック開催を機に規制が緩和されるとともに変化が生じた。すなわち、運動部を選手養成の場ととらえて、各種競技団体の「競技力」の向上を目指す考え方と、運動部を生徒の自発的・自主的活動の場とする教育活動としてとらえて、文部省の「教育活動」の一環とする考え方とが綱引きを行ってきた歴史が存在する。こうして、本来の趣旨からすれば対立すべきではない論理の対立が生まれた。そして、日本社会の少子化も相俟って優秀な生徒を獲得し競技成績を上げることでメディアに取り上げられた。その結果として、運動部活動を中心に学校のブランド力向上の一役を担うようになってきた。

以上のような歴史的背景をもとに現在の運動部活動が存在する。しかしながら、一部による過剰なまでの競技志向や勝利至上主義からは様々な課題が浮き彫りになり、社会問題となるような憂慮すべき事態も生じている。

例えば、「教育の一環としての運動部活動の在り方自体」という問題以外に、「教員の長時間労働」「顧問の実技指導力不足」「体罰やハラスメント」など挙げられる。冒頭に示したスポーツ庁（2018）によるガイドラインの明示に伴い、それを受けて各自治体において様々な面から運動部活動に対する検討が進められている。例えば、運動部活動の方針の策定等、運動部活動に係る活動計画等の作成及び公表等の運動部活動自体の改革に加えて、教師の運動部活動への関与についても明記されている。学校現場においても運動部活動に対する指導者の意識改革や制度改革という大きな波が押し寄せている。

そこで、筆者は「教育の一環としての運動部活動の在り方」について自らの実践経験に基づいて「生徒指導の側面」と「学校経営の側面」から考察し、これからの日本の学校教育における運動部活動の在り方について論考する。

2 生徒指導と運動部活動

1970年代ごろは、運動部活動全体に「気合と根性」「忍耐」という精神論が跋扈しており、「生徒を鍛えて勝利してこそ運動部活動」というような価値観に覆われていた。運動部活動の活動時間自体が長ければ長いほど、また休みが少なければ少ないほど良いこととされ、活動が活発な運動部として評価されていた。以上のような経験から、生徒自身の自発的・自主的な活動であるはずの運動部活動

が所期の目的とは異なった様相を示し、生徒自身のことは考慮されず、顧問である教員の自己満足的な要素によって生徒たちは運動部活動を強制され、ある意味支配されていたようにも思われた。

1960年代に生徒として「剣道部」を経験した筆者は、顧問である教員による支配が例え理不尽なことであったとしても、従うことが当然のことだと思っていた。生徒として無我夢中で剣道を続ける中で高校を卒業し、大学生の時に出会った師範の先生から頂いた餞の言葉が心に深く残っている。それは、「剣道を通して人の道を論ずることができる教師になれ」と言う言葉であった。この言葉は、その後、筆者が教師になり、高等学校の教員として高校生を対象に運動部活動の指導に取り組むうえで、ぶれることなく自分自身の矜持として持ち続けたものである。高等学校教員としての運動部活動の指導を行ってきた経験をもとに、筆者が大切にしてきた「剣道」と「礼儀」の関係について以下に考察する。

(1) 剣道と人間教育

剣道は「日本の伝統文化である」といわれている。時代の移り変わりや社会構造の変化によって人の考え方や価値観に変化が生じる。しかし、日本の歴史の中で、どのような時代にあっても、ゆるぎない心根をもって精進することが剣の道として受け継がれてきたことは日本の伝統たる所以である。1975（昭和50）年3月20日に制定された剣道の理念は「剣の理法の修練による人間形成の道である」（全日本剣道連盟，1975）と定められている。その中で修練するものの心構えとして「剣道を正しく真剣に学び心身を錬磨して旺盛なる気力を養い剣道の特性を通じて礼節をとるとび信義を重んじ誠を尽して常に自己の修養に努め以って国家社会を愛して広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである」（全日本剣道連盟，1975）と記され、「心身を錬磨し」「礼節をとるとび」「信義を重んじ」「誠を尽くして」などが具体的に列挙されている。

また、「千日の稽古をもって鍛となし、万日の稽古をもって錬となす」という宮本武蔵の言葉があるように、剣道は、その修練の道は長く、地道にこつこつと努力を積み重ねることに価値があり、その結果として見えてくる景色が違ってくるものであると伝えられている。

剣道は他の競技スポーツのように「タイム」や「得点」といった明確な結果

を伴うものではない。相手を打ち抜くか、相手から打ち抜かれるかという「一本」にこだわり、その上で、勝負の中に「品性」や「美しさ」といったことにこだわる「伝統文化」である。武道には「礼に始まり、礼に終わる」という言葉がある。この「礼」とは、相手を敬う心を形にしたものである。この言葉には、それが稽古であれ試合であれ、「御手合いさせていただく」相手に対して最大の敬意を払うことの大切さが込められている。剣道の試合において「一本」を取った直後に「ガッツポーズ」をすればすぐさま「一本」が取り消される。これは「ガッツポーズ」という行為が、相手に敬意を払わない恥ずべき行為としてみなされ、指導されるのである。まずは相手と竹刀を交える場を与えていただいたことに感謝し、その上で叩いていただいた相手に、また、叩かせていただいた相手に「ありがとうございます」という感謝の心を表現する所作に「人としての美しさ」、つまり、「美徳がある」と考えられている。

以上のような日本古来の伝統を基盤とした武道としての特性を持つ剣道を通じて、生徒には他人を敬う心である「敬意」ということを中心に置き、人間としての「美しさ」と「強さ」について常に生徒と向き合って指導してきた。

（２）礼儀と生徒指導

人間が営む社会生活は、他者との関わり合いの中で成り立っている。礼儀の基本は、相手に敬意を払うことであり、相手の立場に立つということである。

剣道の世界には「礼を尽くす」という言葉がある。この言葉は、自分のことよりも相手を優先させ、相手のことに思いを馳せることが大切であるということの意味する。この言葉は、現代社会においても人間関係を構築する上で最も重要なことだと考え、生徒を指導する根幹に据えてきた。相手のことを大切に思う気持ち、つまり、「礼儀」は相手の心の扉を開ける第一歩となり、他人のためになることを自己の行動哲学に据えることによって感謝の気持ちを育むことになる。このような指導により、多くの生徒が豊かな人間へと成長していく姿をみることができた。以上のことは、仏教の教えである「自利利他」に通ずるものでもある。「自利利他」は「自分も大切にするが、なおのこと他人も大切にする」ということであり、この心を育むことも生徒指導において大切なことである。

現代社会では「自分優先」の考え方や「自分さえよければよい」という考え方

をする人が多くなり、この風潮が社会を覆い、余裕のない閉塞感や不寛容が目立ち、生きづらい世の中へと進んでいるように感じられる。日本には世界中に誇れる素晴らしい「伝統美」がある。それは日本の歴史の古くから大震災や津波に襲われ、かけがえのない大切な人やものを失ってきたにもかかわらず健気にふるまい、困難に立ち向かう被災者の方々の心模様である。また、スポーツの祭典の後でごみを一つ残らず拾って回る感謝を示す行動も同様である。日本を訪れた外国人は「日本人は優しい、親切だ」という考えを持つことが多い。このような「美しい心」という伝統を再認識し、これから先の日本の未来に向けて「心の教育」を再構築することが大切である。学校教育に委ねられた使命は、礼節を重んじ、相手に敬意を払うことができる人間を育てる、すなわち人間教育にあると考える。

3 学校経営から見た運動部活動指導の位置づけ

1996年に出された「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の中央教育審議会の第1次答申の中で「生きる力」の考えが示された。その後、「生きる力」はキーコンピテンシーを先取りしたのものとして位置づけられた。このことは、日本の学校教育において重要なターニングポイントになったと捉えられる。

また、国立教育政策研究所からは「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則（教育課程編成に関する基礎的研究 報告書5）」（勝野, 2013）が示され、「21世紀型能力」という概念が提案された。これは、「社会の変化の主な動向に着目しつつ、今後求められる資質や能力を効果的に育成する観点から、将来の教育課程の編成に寄与する選択肢や基礎的な資料を得る」ことを目的に、2009（平成21）年度から2013（平成25）年度まで調査研究がすすめられたものである。2013年3月に出された前述の報告書においては、調査結果から得られた示唆の1つとして「社会の変化に対応して求められる資質・能力を育成する観点から教育課程を編成する必要がある。」という提言が示された。

以上のことを踏まえ、本報告書において「21世紀型能力」が提案された。この「21世紀型能力」は、学力の三要素である。「基礎的・基本的な知識・技能の

習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力表現力等」「学習意欲」を「課題を解決するため」の資質・能力という観点で再構成している。さらに、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の育成という学習指導要領が目指す知・徳・体を総合的に関連付けてとらえた上で、これからの学校教育で身につけさせたい資質・能力として示したものである。具体的には「思考力」を中核として、それを支える「基礎力」、その使い方を方向づける「実践力」という三層構造で構成されている。

「21世紀型能力」は、今日、諸外国で求められている能力観とも一致しており、学校生活全体、すべての教科や領域等を貫いて育てたい資質・能力であり、「生きる力』をより実効性のあるものとして、どう発揮するかという方向性を示唆するモデルであった。以上のような流れの中、2018年に学習指導要領（平成20,21年改訂）が告示され、「生きる力」の育成が整理、踏襲され、「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善が打ち出された。

以上に示した内容は、学校教育に求められる教育内容であり、育てる目標である。これは、まさに部活動の指導が持つ教育力と合致したものである。筆者は校長として生徒を鍛え、伸ばすための「頑張ることができる力」の育成を重視した。また、学習活動の先にある生徒の進路実現のためにも部活動による人間教育を重要視する考えを学校全体で共有した。

このように、学校経営の根幹として部活動重視の考えを明確に示し、常に「何かに熱中すること」「かけがえのない仲間との出会い」の大切さや「高い目標を掲げそこに果敢に挑むこと」の尊さ、「失敗は成長の源」だということを直接生徒に訴え続けてきた。また、PTA活動や職員会議、さらに学校説明会の場でこの考えを説明してきた。

このとき、学校長という学校のリーダーとして以下の3点を部活動に関する学校経営の基本姿勢として臨んだ。

- (1) 教職員の共通理解
- (2) 指導者の配置を含む環境の整備
- (3) 保護者の理解

この結果、学力向上、進路指導、生徒指導の各側面においても部活動の指導が果たす役割の大きさが再認識され、生徒も教員も大いに活気づいた。

学力面では、「頑張ることができる力」を部活動で育てることが学力向上にも良い影響を与えた。部活動により集中力が高まった結果、授業中も集中した態度となり、高校3年生になり部活動を辞めた後も勉学に集中できていた。

進路指導面では、前述の学力の向上に伴い、現役で難関国立大学に入学する生徒が増加し、国公立大学合格者数も大きく増加した。

最後に、生徒指導面でも効果が見られた。遅刻者数が多いことは、当時の課題であった。しかしながら、部活動を推進する中で、遅刻者数が減少し、近隣住民から登下校中のマナーに関する苦情も激減した。

これ以外にも、生徒は社会貢献活動やボランティア活動にも積極的に参加するようになった。校内清掃に加えて通学路や駅前などの公共の場でも定期的に清掃活動に参加し、市長から感謝状を受け取ることもあった。

以上のような生徒の姿は学校説明会で説明するよりも市民の目に映るようになる。中学生から「行きたい学校」として高く評価されることにつながり、志願者が増加する結果となった。

4 部活動による生徒の変容

文武両道を掲げる高等学校において学習活動と部活動の両立は大きな課題であった。しかし、筆者自身の経験からも相反するものではないという確信から部活動による人間教育を重視する方針を打ち出した。その結果として保護者や地域からの高い評価を得ることになり、また、進学校としての進学実績の向上という学校のブランド力の向上につながった。そして何より生徒自身の「生きる力」の獲得につながったことが大きな成果であったと言える。

図1と図2に高校1年生と3年生の本校の生徒を対象に平成28年に実施したアンケートの結果を示した。図1で示した1年生の結果では部活動により「多くの人に出会えた」の項目の選択者数が最も多く、70%弱であった。この項目以外では選択者が50%以上の項目は見られなかった。しかしながら、「技術・技能が高まった」の項目のみ45%程度の選択者数であった。

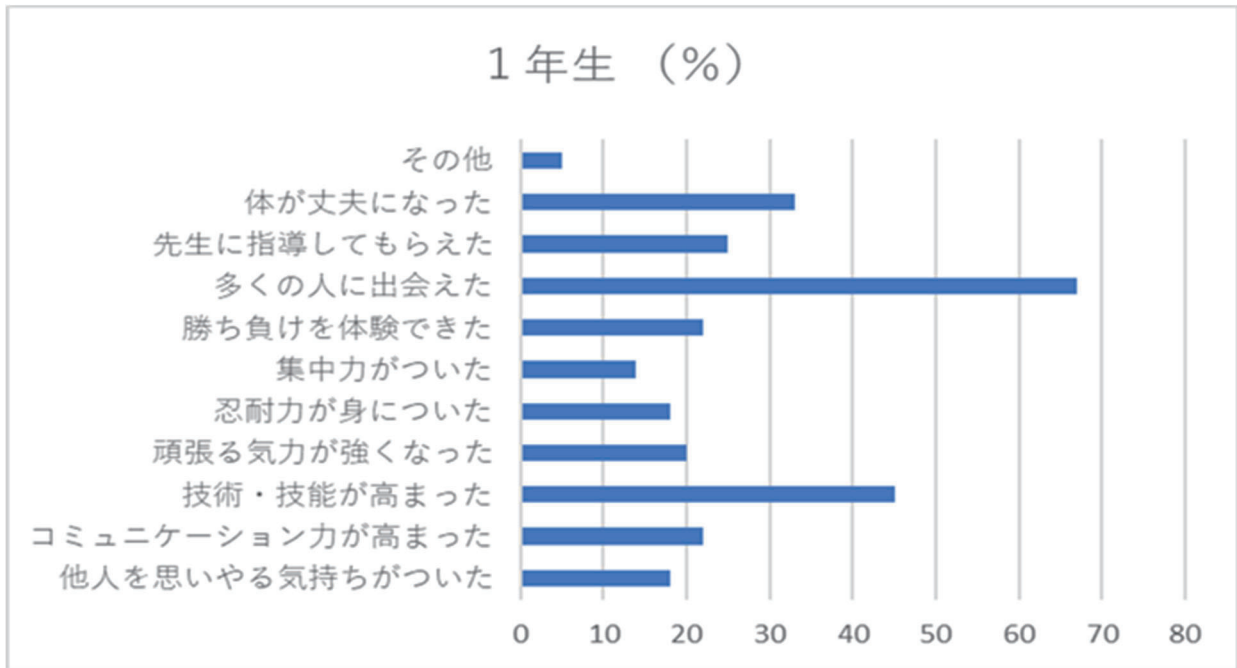


図1 高校1年生の生徒へのアンケート結果「部活動で身についたことは」

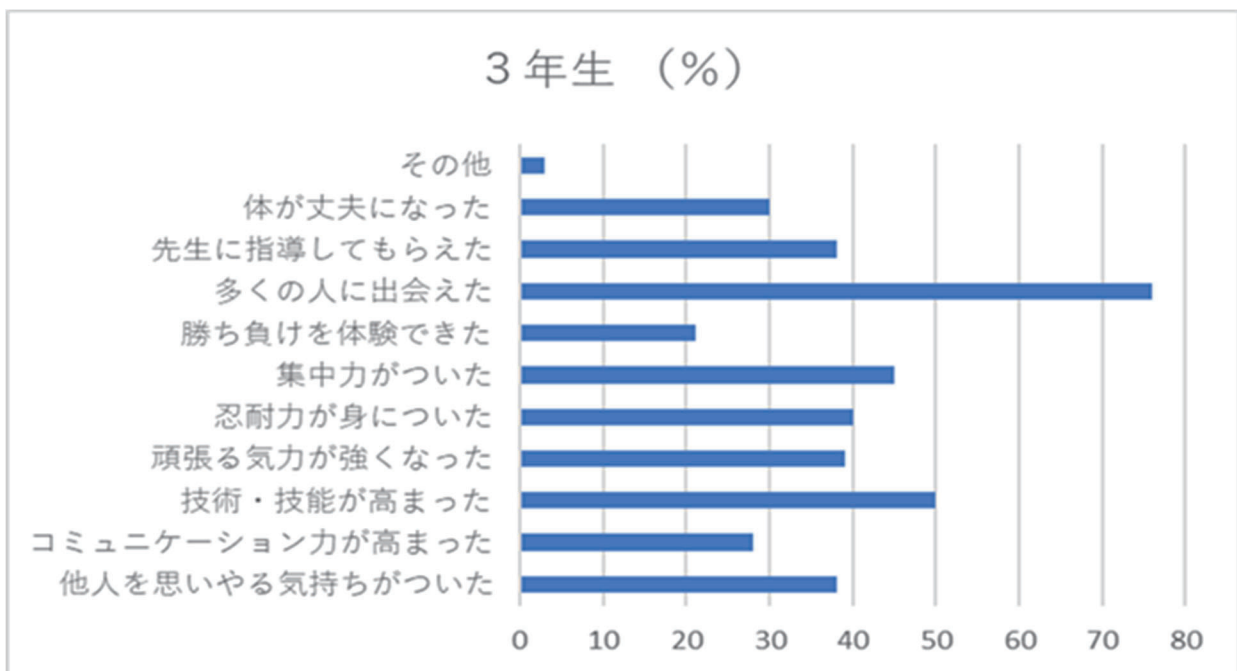


図3 高校3年生の生徒へのアンケート結果「部活動で身についたことは」

次に、図2に示した3年生の結果を見ると、1年生の結果と同様に「多くの人に出会えた」の項目の選択者数が最も多く、80%弱であった。また、「技術・技能が高まった」の項目の選択者数が最も多く、50%であった。他にも「集中力がついた」が45%程度であった。この3項目以外にも1年生の結果と比較すると、

30%以上であり 40%弱の選択者数の項目が4項目見られた。すなわち、「先生に指導してもらえた」「忍耐力が身についた」「頑張る気力が強くなった」「他人を思いやる気持ちがついた」であった。

以上の結果から、3年生の生徒の方が人間力の向上を実感していることが示された。これは、部活動の影響が大きいからと思われる。特に「集中力がついた」「忍耐力が身についた」「頑張る気力が強くなった」「他人を思いやる気持ちがついた」の向上については予想を上回る結果となった。明らかに部活動によって学校全体が活気づき一体感や連帯感が生まれた。

また、最初は、保護者からは部活動によって、入学後の学習面で不安が大きく、部活動で疲れて家庭で学習しないという相談や、部活動を続けることでこのままでは大学進学に悪い影響があるのではないかという相談が多く見られた。

部活動の影響については入学直後の全体説明会に加えて、それぞれの部活動による保護者会の実施、練習見学会、進学相談会などを部活動の顧問の教員を中心に実施した。顧問の教員の積極的な努力により、丁寧な取り組みを行うことで、保護者からの信頼を得ることができた。

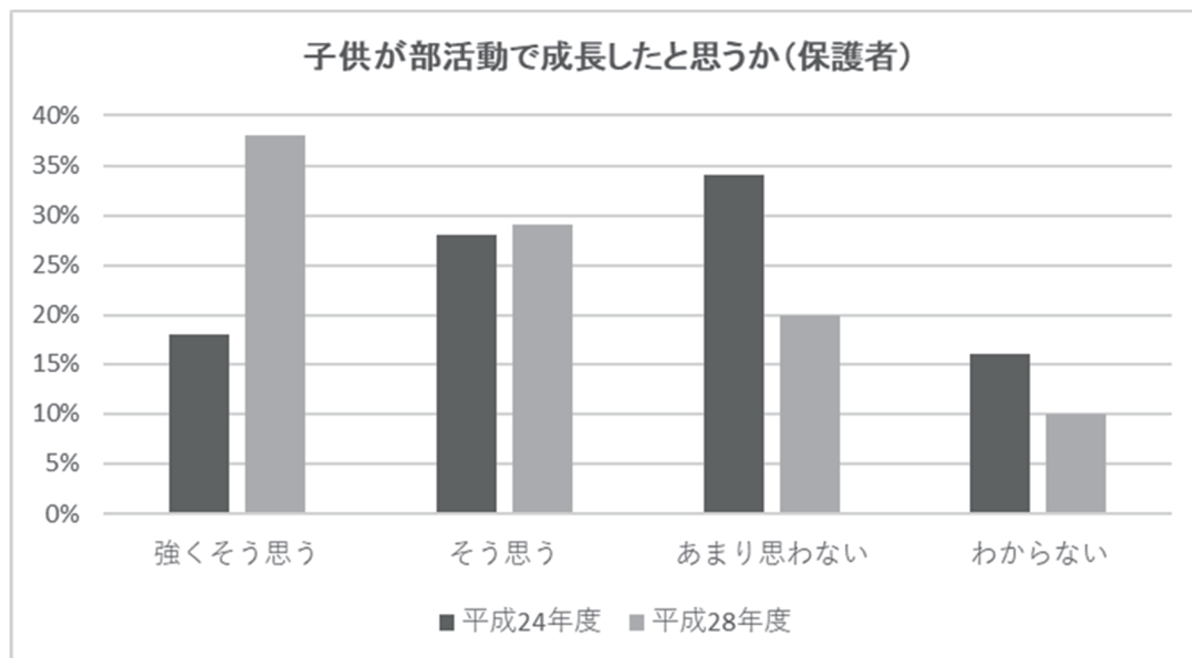


図4 保護者へのアンケート結果

(平成24年度と28年度:「子供が部活動で成長したと思うか」)

以上の取り組みの結果を示すものとして、生徒の卒業時に保護者にも「子供が

部活動で成長したと思うか」という項目に対して「強くそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「わからない」の4件法で回答を求めた。その結果を平成24年度と平成28年度を併せて図4に示した。平成24年度は取り組みの前であり、平成28年度は取り組みを始めてからの結果である。「強くそう思う」の選択者数を見ると、平成24年度は20%弱であったが、平成28年度では40%弱まで約20%増加していた。この結果から保護者が部活動の取り組みによって子どもが成長したと強く感じていることが示された。具体的には、卒業時の多くの保護者から部活動への感謝の言葉となって学校に届くこととなった。

最後に、部活動の取り組みによる教員に与えた影響について検討する。教員側からすると、経験の浅い教員とベテランの教員をペアリングすることが重要であった。経験の浅い教員にとって部活動は生徒指導における重要な勉強の場となっていた。これは、ベテランの教員から指導の技術・技能を学ぶことができたからである。学校長として、経験の浅い教員がたくましく成長していくと同時に、部活動の指導の技術・技能を継承していくことの重要性を確認できた。

5 おわりに

近年益々多様化、複雑化が進む社会において、こうした変化に適合する能力である「コンピテンシー」に基づく教育改革が世界的潮流となっている。

学校現場においても、学習指導要領の改定も相俟って「21世紀型能力」の育成を教育目標の一つに掲げ、激動の社会を逞しく生き抜く力を育むことをめざし、豊かな人間力の育成に取り組む学校が多くなってきた。

筆者の経験から、学校を卒業した子どもが大人になって、「今の自分があるのはあの先生のおかげだ」と言われる先生の多くは部活動の顧問の先生と考えている。それは、部活動を通して、生徒と心が通い、生徒と人間的なつながりを持った先生が数多く存在したからである。このことは部活動の存在価値を示すものである。

今、働き方改革のもとに長時間労働の問題が学校現場に大きくのしかかってきている。その改善策の一番の矛先が部活動指導に向けられている。しかし、日本の教育が従来から大切にしてきた「心の教育」を最も実践できたのは部活動であると考えられる。筆者は部活動の指導が教師の手を離れていくことに一抹の

不安と寂しさを感じている。

時代がどのように変わろうとも教育で大切なことは、生徒をどこに導くのかということであると考えている。生徒の望み、保護者の願いと指導者の思いをうまく合致させ、そのうえで明確な目標に向かってみんなが支えあい向かっていく時間は何物にも代えがたい貴重な時間であり、将来を切り拓くエネルギーとなるはずである。

今後、子どもにとっては心身の鍛錬の場であり、教師にとっては心と心を通じ合う「心の教育」の場であり、生徒一人一人の成長を見届ける場でもある部活動が何らかの形で受け継がれていくことを強く望むものである。

【引用文献】

- スポーツ庁 2018 「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」
(https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/1402678.htm : 10月30日確認)
- 全日本剣道連盟 「剣道の理念」
(<https://www.kendo.or.jp/knowledge/kendo-concept/> :10月30日確認)
- 国立教育政策研究所(研究代表者:勝野頼彦) 2013 「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則(教育課程編成に関する基礎的研究 報告書5)」 国立教育政策研究所.
(https://nier.repo.nii.ac.jp/index.php?active_action=repository_view_main_item_detail&page_id=13&block_id=21&item_id=471&item_no=1:10月30日確認)